【中学生区分】

宮城県最優秀賞

「私と障害」

大崎市立古川西小中学校
９年　菅原　怜美

「障害」これはある人とない人がいて、私はその人達の間に少しの壁を作ってしまうものだと思っています。ここからは私の三つの体験談をもとに話します。

去年、町を歩いていた時、私は初めて白杖を持っている人を見かけました。その時は、意外と近くにこういう人がいるんだ、少しめずらしい人だ、という印象をもちました。また別の日、ある場所で行われたお祭りで車椅子の人を見かけました。このように障害がある人とない人、お互いに楽しむことのできる行事があることはとてもいいことだと思いました。

小学生の時、近くの支援学校との交流会がありました。その学校にはたくさんの子供がいて、高校生までが通うことができます。その日の交流会では私達と同じ年齢の小学生と様々な自作のおもちゃで遊びました。そこに居た小学生に対してわたしはどのように接したらいいのか分かりませんでした。ですが次第に、この子供達は少し世話をやきたくなるような同じ小学生の友達なんだという気持ちに変わっていきました。何回か行われた交流会が友達と会え、遊べる日という認識をしていました。

中学生に上がって今のクラスメートとは二年半一緒に過ごしてきました。ですがこの前に一人のクラスメートが何かの障害を持っていることを友達から聞き、知りました。それを聞いた時の私は驚きましたが、嫌だなという気持ちには全くなりませんでした。入学してすぐにそのことを知ってしまっていたら、私はそのクラスメートに対して避けたりしてしまうことがあったかもしれないと思いました。なぜこのことを聞いたタイミング

によって私自身の態度が変わってしまうのかを考えてみました。そうして思い付いたことは、私はその人のことを知っているからということです。初めの全く知らない私だったら、障害者という言葉でまとめて私自身が嫌になってしまっていたかもしれません。ですが、二年半一緒に過ごしてきた一人のクラスメートとしてその人の性格やこれまでのことを知っていたからこそ嫌になることはなかったと考えられます。

　これまでの三つのことで分かったことは、私が知らないだけでこの世界には様々な障害を持っている人がたくさん居ること、私の身近にもたくさん苦労している人がいることです。私が障害を持っている人に思っていたことは、大変そうだなとかどこか他人事です。でも、いつか私自身が何かの障害を持つことになるかもしれないし、もしかしたら障害を持っていたかもしれないといったたくさんの可能性があると気づかされました。これからはできることは少ないと思いますが、そんな人達を少しでも支援することができるような立場でありたいと思いました。